梅園叢書

上

121.89
M562b2
W

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

121.89/M562b2

帝国図書館蔵書

梅園叢書

浪華書肆

文海堂
宋榮堂合梓

三浦安貞先生著

全三冊

梅園叢書巻之上

目錄

一 詩を説て道に志す人に喩を
一 酒食欲の誡
一 生前死後の理
一 禍福八命也との論
一 織田信長恩賞を賜ふ話
一 雨森彦太郎軍功を譲る事
一 武田信玄の知言

3251

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

一後世を願ふ心得違多き事
一上たる人の心得下たる者の痛となる説
一恕の道の説
一物毎に一得一失の理あるといふ説
一交際の道を弁へ有べき事
一和歌を引て材藝ある人の箴を説
一人の向きを捨よきを取といふ訓
一継母と前家子との話
一盗人の名目種々あるといふ説
一村松喜兵衛の弊世
一技藝勝たる人慎べきの事
一劣れる者ハ見るにみがくべきといふ説
一顔貧といふ言葉いかゞといふ論
一物の命をたつまじと助るの理ありといふ説
一學ぶ志し藝に志す者の訓
一知るとハ易く行ふとハ難しといふ説
一よとかくもすれと必察をべしといふ説

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

梅園叢書巻之上

豊後　三浦晉安貞　著

詩を説て道に志を人に喩ふ

詩曰、厭浥行露、豈不夙夜、謂行多露、情を道に志ん人を、此詩を味ふべし、是ハ女子淫人をこつの言なりといへども、詩ハその意ひろく、厭浥とうるほへる行のかとり朝露繁ければ、夙夜ともに思へども、露よぬれん事の夙夜を夜ともさく君に随ひくるなり、人各聖人よあらざれバ、情ひろく慾に動されぬるいまし、或ハ色より財より酒

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

食より、あるひハ憤怒より好樂より親愛よるゝ、これ
是ハかくハあるまじき事なりと、身の活を露ぬる如くよく
道のあるへき所をりとめて、慾をとゞめん、ハ誠ニ君子の人なり、

酒食欲の誡

酒食欲の三、是人の大害とすべし、酒を少し呑ときハ憂を
くハ病を醸し、大ニしてハ禮をうしなふ、むかし邵康節酒を
この物、酒を名つけて太和湯とよび、只のんで微醺して止む、故ニ
その詩ニ

性喜飲酒、飲喜微醉、
口先吟哦、吟哦不足、
浩歌不足、無可奈何、
飲未微醉、遂及浩歌、

いふ心ハ、生質酒を好むのむ事ハ、酒氣而已をめぐる事をねがはず、詩
など朗詠しやむことなく、よく酒をのむの道を得たり、近き比
松平伊豆守信綱を一時の賢君なりしが、ある夜咄の序、臣
等酒の徳をのべ君ニすゝむ、信綱の宣ふハ汝等ごとき子あり、
その子の悪く酒を呑ん事を願ふと、飲ざらん事ハ願ふと
有りなバ、臣等暫く黙しく居ん、子を酒を飲ざらんと
その親のこゝろのやさしくいつくしむ人の至く愛するハ子

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

あり、酒若美物ならば、豈子の呑む事をいとうんや、是千古の公論といふべし、上戸と下戸とハ氣稟なり、醉と醉ざると八節よりあり、壯なるハ少艾をもとめ、人情の常なり、ひとり人のみならず、水よりも鳥、山よりなく盛も、皆その偶をもとむ、志ハあれど、人を義方の路へあり、媒をはぶくめとり、牆をこへて處女をひく、人とりもいわんや、是學者入德工夫の第一也、花の顏春を妬み、柳の眉月を欺き、目ハ挑ム心ふひらば鐵心忽融ー銳氣忽碎ん、故ハ氣千里をのぞみ、勢萬人をとりひしぐともおよぶに至つく過ざるハなく、朱子も世上無如人慾險幾人到此誤矛生とて自警ありし、白樂天ハ詩ニ、狐假女の妖害猶淺、一朝一夕迷人の眼、女為狐媚害即深、朝朝夕夕迷人心といへり、學者心をとゞめざるべんや、安東省庵いへるハ、無求是至貴、知足是至富、安心是至樂、予其地ハさらばといへども、ふく其言葉ハ、身萬乘の君とをるより、富四海を有てなを、長生を欲ー福田をとゞめて身を勞ー終ハその貴さをもうしなひ、近比太閤秀吉公ハ匹夫より起ル、已ハ日本を掌握ー、其心猶あきたらず、朝鮮をせめ明ハいらんとし、天竺ハ是ニ年をかー、且勝事を得をもとめバその心明ますてぞほつど、一生何の日ぞあくをしらず、利ニひかれ慾ニ動るれバ富陶朱猗頓

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

を欺き貴きを人の位を極めても憂愁の地を離れざる故に富貴の外に富貴あり樂の内に不樂あり

生前死後の理

死生の説明なるもこれ異端の説なり予易を讀て原始反終といふにより つく諮然として悟る事あり死しての後は生ざる前の如く生ざる前吾もなければ死しての後吾いづくんぞあらんむべなる聖人其あるべきを所をもとめて其知べきざる所をいふざる事を、かくへの人に曰おそらく人死して霽なり、祭祠も無用の事なるべし、曰然らば人死して靈あるもなきもあるべく又有とするもあるべく、生ざる前あるべく死しての後吾何ぞ知ん故に孔子も未生を

ざるべく、何ぞ死を知れんと宣り、火をもて尚煖なるうちの其氣存するをあればなり、況人情已に死しといひて、道行人にもれたる如く、跡をも事もなく打捨るべきや、是人情止事を得ざるようおこなり、祭る時にいつくしみ、吾心あるごとくぞせよと教ひけて思ひ出られ、なき面影をく社有るごとくく誠をつくし、祭る時その誠の心おほふべくべく、鬼神感格洋々乎そこく上にあるが如く、左右に在るが如しこの境をよくく思ふべし、

禍福ハ命ありとの論

世俗巫祝の道を信じ、災を得難に臨み病あるの時、願を結びく佛神に祈る、是固に所謂ざるにあらざれば、周公旦兄武王病

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

ようとゝのひ、成王（武王の御子也）尚幼うして、爪を剪て天に祈のりひ
しぞ、親兄或ハ君上の病をる時、子となり弟となり臣となるも
の、寝食る事能ずいんともべきぞ、爰を以く天にいのり、鬼
神にいのり、固より心かくの如くるぞる事を得ず、我身に於く
ハ志るべし、太甲曰、天作孽猶可違自作孽不可活といへり、
不意にして蘗にあひ、吾招く所にあるぞれハ終にハ免るべし、又
君をうしひ、父母兄長にさうひ、人を讒し人を殺し、あるゆる積
悪誠に已より出る者ハ已に歸る習なり、或ハ酒にやぶれ色
にふけれ、吾天年を損ひ、るを自ら知ざる所なり、顧く身を悔べし、
神に負つゝ天を欺きて此蘗のうるべきや、孔子病のりしとき、子

路（孔子の弟子）祈んと乞しかども丘がいのるを久しと宣り、其いのるぞ平
生の動作道にそむくべし、今の病にあるのハ是命也、るを何で
鬼神にいのるへきぞ、子路固より孔子に告ずして祈る事あらば、弟子
惻惻の心なるべし、邵康節の詩に、禍如許免人須諂、福若待
求天可量、といへり、是よくいひえたり、自禍の階をなし、是を悔
顧る事をるべくハ鬼神に祈て免べくハ鬼神も賣借すべし、鬼神
も善を善とし悪を悪とする事能ぐんハ幽冥の中恐るゝ
らば、悔ある諂て免るへし、吾行いまだ福を得べき基なく、
天に求て得べくハ、天も又邪正虚實を分つ事能ず、天もはた
るべし、人も賢たる人ハ賄賣僧の為に顛頃偏頗の沙汰に

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

及び、増てや鬼神を冥冥うく昭昭う、天ハ高なる君くびくをる、蒜を食るの人必臭く、酒を飲るの人面酡し、其箸をとり盃を酌を見ずといへども其事自明なり、已が私の智を以くこの過をかくさんとする、愚也、蒜の臭と酒の氣とハ猶くをべし、天ハうなる欺べうび、心を勞し身を苦しめて祈んようハりて我徳を修むべし、この上よく災あらん是命也と抱ふべし、禍福ハ命あり人力の及所よあらび、此理をさとらざる人ハ網を結びて魚を羨、とるをまて兎をまつなり、決して此理なし、偶いのりて得るとも偶いのりて得ることあらび、たとへバ小兒といへども是偶然なり、祈が為うて得ることあらんや、待人を問が如し、待人返るべしと謂て歸りうとも、是小兒の占委しれ故とふべうび、偶然なり祈願の志有て求ことをあらび、齋戒清淨うて衣服を改め心をひそめ妄意を動さび天よ告べし、今の俗然らび、或ハうの災のるへく此病るべくバ堂塔を建立をくし鐘を鑄るへし鳥居を立ざるなと噪ぐあらく、畢竟是等ハ佛神と商ひをるくし、是ハ猶病よ臨ま難よあらのるとき、一身主とまる所なき人ハかくもある事なり、或ハ訴論色慾よりうび奸佞嫉妬よりうび人を害ん事を計るともう、神木よ釘をうち佛像を倒なしていのる、此事ゆめく人よあらるべうび、自らその災よあふへし、むう漢武帝鬼神の説よ迷ひ、殊更越の巫を

叢書止

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

信向あり。仁に董仲舒と云臣ありて、武帝に諫め奉るに、彼巫をめし仲舒を詛ひ給ひける、仲舒正しく南面して經論を誦詠しける、何事もなく、巫即時に死しける、神は非禮をうけずといふ事をいふ。

織田信長恩賞を賜ふ話

ある人家に失火事あるに、平生家の者にいましめて火を大事に過ちなく人に賞をとらせ、さる人は常に火を慎しむ事を大に賞せられがたく、さる人より人手柄なるべきを、うつくしく何の沙汰もなし、織田信長今川義元と合掛山にて戰のとき、梁田出羽守計をもつて、終に勝軍となり、毛利新介大に働き義元の首を取たり、信長馬より下りざる内、皆掛村三千貫を出羽守に與へ、馬より下く新介を賞せられ、誠に信長に非ざれば、出羽守の功名新介に次ぐべきを、

雨森彦太郎軍功を讓る事

加賀利長松山の城を陷いれられた、利長の小性大音藤藏と十六なりしが先登して首をとる、雨森彦太郎これをねたみ城よりおりくる首をとりやすく馳うるに、利長祐筆に命じて一番首と記さしめるまゝ、彦太郎

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

辞謝して否一番首八大音藤藏まて侯、某ハその次まて
侯とそ申る、一番首をとるまて遥まてうけ給ハり、
武士を誠とかくこそありたき事、
武田信玄の知言
武田信玄の曰、人ハ唯我もと思ふ事をせざらんやと思
ふ事をもるならバ、分分體體全く身をもつべしとなり、
後世を願ふ心得違多き事
今の人後世願ふも施しをもるも、十が八九名と慾となり、人
と毫釐の利をあらそひて堂塔の建立し、奴僕よかう
き目見もるなんど施し、口舌争論の片手ま念佛申も
ハ、却行して道を急ぐが如しいまの後世祢ぐひ施しもる人を見
ん、阿鼻焦熱の物語りに肝をけし、九品蓮臺の上ま生を
ま百味の飲食ま全盛の盡したき慾よりなるべし、さなきハ彼
人こそる善根をなしつるとて、人の稱讃まあるそん事をもと
めてなり、然ともその身五戒を犯ハ十惡を事とし、傍
ま佛ま諺そん、ハ醫師の藥をもてとて能書をよく、爽の瘡んを
をもとむるが如し、先五戒を守り慈悲ふかく物にあるそん事
なくして心をつまま後世祢ぐひ施しもるとも、ハまその道心者なるべし、
上そる人の心得下そる者の痛となる説
一村の長ハ一村の人の命是まかそる、一縣の長ハ一縣の人の

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

命こそ係る、一國の主ハ一國の人の命是に係る、天下の主ハ
四海の人の命こそかゝる、人の命こそかゝる事をもつぺ、其
任の重き事をもつて、夫一个の民ハ惡をなす罪科ハ行ハ
るゝといへど、自らなりてこれを其咎をうるのそ、假みも人の長ともなる
べきものハ、我慮り一度誤ちハ、あへてその人その難をうく、暫も薄氷を
ふむの心をもつべし、又貧しき人富る人の隔あるべきに曹
子建が詩に、十指有長短、痛惜皆相似といふ、小指ハ母指より
おそく、母ゆびハ中指より短しといへども、其病をうるに臨んで
ハ、小ゆびの痛も母指のいたみも皆異なることなく、富貴の人の榮辱
まあるも、貧賤の人の榮辱まあるも、富貴の人も憂苦も貧賤
の人の憂苦も、十お指の長を短を違ひハあれども、そのいたむことなること
おなく、人ハ貴賤貧富の差等ハあれど、憂苦哀樂の違あるべきに
ハ

怨の道の説

世話に、身をつめりて人の痛さを知ることハ、賤しき俚語もつともよく
道ふなり、身の痛き事をもつぺ、人もいたかるべしとおもひて人に施
さゞるなり、よろづ人の善惡ハ見えて身の善惡ハ見えぬ
ものなり、さるを人の善を見てハ是まねびん、惡を見てハ身
にこりおぢ、いましめとなすべし、或ハ我子のため
に不孝なるを見てハ、この道を以てらば父よかるべし、我
弟のいまいましきを見てハ、我此道を以てらば兄よかるべし、

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

我身に骨の折る事ハ人の身ともなし、我身ハ悲しき
事ハ人の身ともなし、一切さもあり、是を怨むる大
學ハ絜矩の道といひて、宋の王旦といひし人、寇準と云
し人と同しく仕へて、王旦ハ中書令あり、寇準ハ樞密院
にありしが、中書より出しものゝ印を倒さまにして遣し
ける、寇準速に人を遣して行謹しめ、その印樞密院より
出しものゝ、亦あやまりて印を倒さまにつきたり、時に中書の者
ども右のごとくなんといひける故、王旦聞てさきの樞密院より
の仕方よろしく思ふやあしくおもふやといへバ、あられこそといひ

出入して内外の隔なく、大臣の女河上姫ようひろう、是ハ
崇峻天皇の嬪御あり。人なり、馬子この事を聞つけ大ゐ怒
り、直駒が髪を庭前の木の枝にくゝりつけ、弓を取て是ゟ向ひ、
汝愚なる言を用て　天皇を弑せ、汝愚まして我いうを慮ら
ん、我を諫めそこなひて　天皇を弑せしめ、餘事我辭謝さゝんぐ
一節をまなつ、直駒いうて敢て伏さず、吾其時ハ大臣ある事を
知さ　天皇の尊き事をもつざるのみ、一ツの罪を數ゑ箭
ゟ罵りつゝ、馬子腹をたゝ矛、劒をぬき腹を潰しそのち首
をきりとるや、其身正しくして忠あるぞ、人のよこしん事をせむ
とも、人いかでう其罪ゟ伏さんたとへバ火をもつて湯の熱むるを
もむるが如く、酒をすゝめて醉もつふが如し、

物毎ゟ一得一失の理あるもつふ説

金ハ天下の至寶なり、こゝを貯ゆるものハ家富めり、されど
是ようて身を失ふ者あり、人參黃耆ハ藥の隨一なり、され
どこれを服して命をおとすものあり、劒術兵法ハ身を衛る
のなり、されど是ようて身を殺すものあり、醫術ハ人を
救ふの也、されど是ようて人をころすことあり、飲食ハ生を
養ふものあり、されど是にようて我體をやぶる事あり、國の
大臣ハ國を治べき者也、されどこゝをよようて國を亂るの
あり、此さうひ能々工夫をべし、

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

交際の道あるべき事

権貴の家と女子ある家とは屢出入をすべからず、あるじ留守の家などゝもべ、主人欠伸をやく立ち、人来りて問ふ事あるとも志他あしばかり詳らかに説べきぞ、吾好事なりとも人のまぎるゝ事をば語べからず、朋友も深切の異見再三ならば可ぜんば止むべし、我なをべしと思ひ立つる事は明日あらんと思ふべからず、貧しき人は疎くやすく富貴の人は親しきやうにと知べし、金銀よのぞみて争心起るものとまるべし、

和歌を引て材藝ある人の箴を説

賤きをのむは人情の常、まされる我をうやまふは人慾のつゐえ

この故に材藝有人は慎むべし、木林を出る風かあらし折ふし、近頃材智は身難と云ふ、中院通躬卿の御歌と

そらだきもの侍りし、

人に見よおのづからぬるゝ香の

をりにふれ梅の下枝

人の短きを捨よき所取るの訓

思なん人のよき事もよく察しとゝのふるあるべし、

まして賢人の言を、今人過ありて、其非を人の正さゞるをば、

昔の誰某もかゝるあやまちはあり、況吾等ごときの人をや

などゝて悛る事をぞ、是小人の過は必文るといへる

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

ベー人のよき所をとりて、其悪を所のよき手本となさば、何の際限あるべき、たとへバ料理をもるが如く、魚鳥の羽鱗骨腸なんどあしきものをバとりすてゝ、そのよき所をとりて、梅しゝ酢を加へ酒をさして旨そうに事をそなへむを、旨き肉魚鳥の最上なるにも、今のおとく拵へたるハ薤の汁蓼の和物にも劣るべしの直ゝん事を欲さバ、準繩規矩を用ゆべし、是をおきて、拘子を取て定規とさんするも、千萬年を歴るとも直くハなるまじきなり、今の人あしきをとりよき

の過を覆ふハ、是ぞ誠の拘子定規あるべし、

継母と前家子との話

世に継母継子の中ほど、十に七八ハ悪しきは、実の親ハたゝひ杖をとりて指南すとも、深くゆへなく暫有ても、五に如在なくあるものなり、継しき八世の習ひとて、子ハさや、定めて継母をバ心中に打とけハなきまゝと思ふものの已に胸中に横たはりて、こゝを不和をなすの基あるゆへ、よりて假初にも事もむつかしく聞故まむ祢に逆ふ也、ほゝさやうに、左なきだに金言耳に逆ふなれバ、ゝが過を思ハゞ

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

て、是もまことに故あり、誠の親あらばこそ憂目をはあらじなど、世をそこはかとなく述懐しぐれんせなるころを同志、理非をくぬ隣の媼や嬢あどいその品ハ何ともあらでもハや此人も継子まことをもととて、彼子と咡くやうに、長しき異見ハ露なくていろくとそぐろをかまを、互へぐそくの思ひをおとむ〻或人の家ハ屏損じたりけるを、其子ハいひるハ、かく屏の損しハ、盗人こそ入るなれ」といひる、暫く隣の人来りて、その子のいひごとく、屏の損し候、ぬを人こそ入るれといひが果てその夜盗人ありうの親、吾子をバ智ありてよく察しうとおやひ、隣の人をバらの人

かくそいひ、そや盗人の手引なんと疑ひるとなん、さまバその詞も同じ言ふく、聞人も同じ人なるく、子と他人との廉ぞあれバ、その思ふやうにある、おるく秋の夜も、少年遊樂の燈の前ハあけやをそをそく、孤婦愁思の閨の中ハ明やぬをかこ川、秋のよに違ひらあらざまでも、志く各こなればおり、今まその親生く再びふとも、そのあとび假令同じ事もあるべれど、已に繼子の心ハ隔あれぞ、おやそびも怨のうともある、関子寡幼く時母よおられ父うびめうて三人の子をぞもふるる、その母常に関子をふく、冬のそものうち蘆の穂をぞ

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

つゝしく絮こゝろせるさまなれど閔子をうつくしび母を敬ひ弟を愛しこゝろ其後父その事をもちて大に怒り、母を追出さんとするを、閔子とゞめていふやう、ひとりこそ寒くとも、母り歸を給ひば三人ともに寒くとも、よくつゝましてなごめり、母も此事よく感じて遂に慈母となるとぞ、誠に親のこゝろと思ふべく、又継母となる人も、始のほどは嗜みて最愛こゝろざすべき内子をどまれ長るまゝにひていつしか兄弟の分を忘れ、我子を世に立んと思ふより、枕の上の寝物語も、長子のよきことをばもてなしいひ、我子のよき事のみをとりて、男の親も何をいづ

のそゞでいはるゝまでいその詞十度ゝなびかれだ、さて此事ハ思なりにて、その子こそ賢りきとおもひはてゝ、しくなり、彼ハ次第ようとくなり行てあり、不幸まて此變ほ逢人ようく慮こゝ、曽參ハ孔門の内にてもとくて孝行なる人ありて、その母機をおこれるまゝ、一人来りて曽參人をころしたりと云、母もとより疑ふ事もなきだに、もあつても騒ぐ色なく、吾子ハ人をころすもの者にてハなしとて手やめもさだ、うる所に又一人来りて曽參人をころしてかく云れバ、母前のごくいひく驚うど、時よくて一人ときてもうる事あるやと杼をなげて逃ばり、後ときけバ曽子と

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

同一名の人そありそこそ、曾子の賢親子のそこと中
さへ、度ごとみ正べくとごりのごろ起るなり、まして常ていの人の
中をや、

盗人の名目種々ありと云説

盗人はをのれ〳〵こゝろのなり、盗のをはしまる事を知らず是
より義よ進むべし〳〵、傍の人の曰、盗ハをのれ志ある人を
きび、頑愚の人よくべし〳〵、豈中人以上の失なんやと、予が
曰然らば、盗人も數あり、壁を穿ち垣をこゑて人の財を
盗むこれ穿踰の盗人とふ、或ハ人の家よ押入、あるひハ往
還よ待伏し人をこり衣裳をこばぎこゑる、是を野伏強盗

とふ、足下の云所ハ是等の盗人なり、足下一をありて其
餘をこらば、上君よ事ふの忠なく、下國を治るの術もく、中自
の職分よ怠り坐よ大祿をこむ、是位をぬをむの盗人あり、
謀をめぐらし偽を行ひ、君を弑し國を奪ふ、是國をぬをむ
の盗人なり、詩書を腰すり口法語を絶ず、退く其隙をうかゞ
へハ、父子相争ひ、兄弟相鬩ぐ、これ儒をぬをむの盗人あり、頭を
やるめ三衣をまとひ、我慢偏執のこゝろはなく財利よふける、是
法をぬをむの盗人あり、人のよこと言をぬをむこと自の利口とし、
我行のあしきをいひまくる愧る事を知らず、是言をぬをむ
の盗人也、ひろくあまねる悪心をおこし、顯み善を示しく外

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

面堂堂たる君子あり、是善をぬすむの盗人なり、心は無量の僻事をなすとも、色をつくろひ肩をそびやかし諂ひへつらふ、是色をぬすむの盗人なり、人の志ひそかに在所をさとり、其人の機をかんがへ、その喜ぶべき事をなし、恩所をさけ、父子のまことれ情をそそのかし、兄弟の恨を起し、夫婦恩愛の中をやぶり、朋友の交りを失はしめ、その悪至らざる所なく、猶自ら人の腹心と思はるるごとき、是心をぬすむの盗人なり、盗人の至て大なるものは心をぬすむの盗人なり、その次は國をぬすむ盗人あり、穿踰の盗人の如きは盗人の至て小さきもの也、國を盗むものは侯となり、鈎をぬすむものは誅をうく、

なるべき穿踰はうろたへ事なども察せざるべからず、壁をうがち墻をこゆるの事はあれども、一紙半銭の事により交易の間子の親の物を於る、弟の兄をあざむく、奴僕の主人をぬすむ、盗人の列なるべし、もとより是をばとくぬをむべきやうはなし、諺にも針とるの車をとると云り、色は恥り博奕を好める人を見るに十は九此失なきはあらず、吾輩の如き、天地の間は悠悠として、少壮の努力べきをもつて、老の至りなんとをもらば、飽まで食ひ暖かに衣て、自ら守るの節なく人をおゆるの術あらば、幾ばくの間中の好光陰をぬすむぞや、

村松喜兵衛の辨世

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

近頃淺野内匠頭長矩の家臣、村松喜兵衛入道隆圓、大石良雄等の義士と、吉良義秀をうちはたして終を全くする辭世よ

命まつへぬひとつをうしなはぐ
みがゝれてもまたをのれん

人の至て大切なるものハ命なり、命ゝもつへぬひとつとは義よりあつくして何をや、村松是を求て是を得うとむべなるを四十七士の員よりなり、名一天を動しける事、

技藝勝さる人愼むべきの事

技藝ハ人の嗜むべき事なり、技藝勝たらんハいよ〳〵重んずべし、さるにても人の妬よあふぎのなり、倩これを鑑るに、我よ甚きてれる者をいさめその失をあらためてそしる、我よ少く勝さるりのをバ妬む、我と相敵をする者をバ吾よりおとりあざける、是藝よ遊ぶ人とゝも、我より劣さるりのをバあなどりあざける、是藝よ遊ぶ人の病なり、

劣さる者ハ見るけがらはしとの説

西施愛江、嫫母棄鏡といへり、西施ハ昔の美人なり、江よ臨て自の影のうつるを愛を、嫫母ハ悪女なり、我影をまくて終よ鏡をもち、我身と人とを見るまゝ、それより勝さるりの、我よりおとれる者あり、我より劣さるりのハ見やをるへし、それ

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

ようきそれるその八見そこ、蟷螂の臂をそりて車こ向ふ、自らのちからをそこゝざれバなり、高雄の文覺、西行がそるまひをそこてかそこゝろいそく思ひ、その法師来らバそこゝろよ打べしなど、つねく罵りけるに、或そこ西行高雄こ至りけるよ、文覺こ、れをむかへさせる、文覺が弟子なども定て例の荒氣よも唯事こ、てハあらじと思ひけるよさハなくて、むかふより知音る人こ逢そこ、如くあそこくしく色代して遠く送りて別ける、弟子等不審こおもひ、其事を文覺ことへバ、いやそよ西行、我こうべきを者こあらバ、動をれバ我をそこ打べき氣色と云てやそれバ人此所こ暗して、そこゝろまそこる人の上こおろかこと、或八其及バざる事を知るといへども、及ぶそこるこそこりて、その人の過をそこ祢そこてハ害心を起をり、人各聖人こあらざれバ其非を見付くいそんよ、誰こあやまちなるべきや、譬バ刀八紙をそこり楊枝をそこづ、梨柿の皮を剥が如を、一切日用の事にもちいんこハ小刀こハ過こおとりぬべし、そこゝろとて敵このぞこて戰をいどむこあそこりて、小刀何の用こ立べきや、小刀のよそこ所あり、刀のよそこ所あり、刀のよそこゝろを所小刀用こなそこゝろバ、小刀のよそこゝろを所刀用こなそこゝろといへども、其一體を論をそこに、小刀ハ刀と同じく

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

論ぜべき物にあらざれば、ひろう是のこなるを、不學ふて學者ぶり、人に問ふ事をはぢ、不才にして能をそしり、貪くして富るをよび、賤くして貴ぶる、孔子常なき人をなれる有さま、虚なれども盈るごとくの、是等の類なるべし、

顓頊といふ言葉いつはりといふ説

顓頊といふ事を假るも云ひ事なり、理非を正さば理のある所あり、何ぞ是を顓頊といふん、今勢ひよりく人、手を入れ足をいれ、誰人のひいきと、誰人の引懸にあげうると、嗚呼がましく時めき悦ぶハ何の心ぞや、あさ

を事どもなり、芝居の役者野郎などのいろんな相應の言

ある事、

物の命をたつもまた助るの理ありといふ論

物を殺をハよきことにあらずといへども、一我意に殺生せぞと心得たらんも惡るべし、なる程どその道を修る出家道人ハ、蚤虱ごときものもそぶりに殺さぶる事ハ其律あれバなり、豆をうゑ粟を蒔んにも、その蓬莠をうをてその上もあしき苗をバとり捨生育るこそ登るものなり、今日政事おぞに預るべき人を、其利害の大小を考よべし、江海の鱗を漁り、山林の羽毛をとるも、こゝに命をたなぐ

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

ものあり、就中野猪の稼をそふひ、熊狼の人をそこひ、小ま
しては雉兎鼠等の災をなし、ところ
ふべうらごと、盗人の國中を横行し、或ハ恣まして上の法度
を背き、或ハ人を殺害するごとくの、皆その尤そのものなり、是
いとゆる蓬をそり莠をそるのくびひ
物の甚しきを、指をそりて療治をそる事あり、歯などのゆるぎ
いそむよ、此歯をぬきそくる事あり、此指此歯をそさよ違ハ
そるとでも、總身の苦痛よハくぐく、此者どもも可愛そう
ぬよあ〳〵ハ〳〵ども、多くの人の歎よハくぐく、然そでよそうて
國人よ仁義の道をおよ人ど飢寒よ及よ様よなして、其民

罪をおかし盗をせんや、教と政のそこひざる故なり、おゝ〳〵
そひものよそん事を願ふハ、手習をして物を書んこと
を求むる如し、民を貧しそめて盗人を禁ぜんや、田
をほして稲のあさ地そむがごとく、國よ罪人多きハ執
政の愧なり、一縣一邑を主どる身も此心得大切なるべし、
むかし秦穆公秘蔵の馬を亡ひたり、時よ岐下とゆふ處
の民三百餘人是をころして食ひたり、官人どもこれを見付
く、法度よ行んと云ふを、畜生のゆへよ人を殺をべきにあらず、酒を
馬の肉を食ひ酒を飲ざれや人よあたるものなりとそく、酒を
そびく故さゝれや、其後隣國と戦おこり、穆公をでよ危う

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

一時、その三百人のものども命をすてて拒ぎ戦ひ、終よく軍となりうるは、さればこそ天地の間春夏ハ物を生じ長じ、秋冬ハ物をそこなひ、そのそこなふものも、草木五穀となりうるを来年生ずべきの基をなせバ、うちの内より生ずるの理あり、今物をころし人を殺さんも、助るが為まことにころさゞるもあるべし、此理をしらずしてこゞうる物の命をたゝバ、大悪無道の人なるべし、

學ぶ志し藝ぶ志を者の訓

今の人、或ハ學ぶ志し、あるひハ藝にこゝろざすもの、一旦憤を起し、晝夜をうちわすれ、法をもとめむとすべども、已に一月を経、半月をすぎ、急る心もやく生じて、吾はとめの至ざるといひて、生質の過ぶる諉を馬ハせて朝暫くまでやまんといひて、午の終日あり、かんぶるに及べを、谷間の石を磨けん、井綆のあるくなるも、豈一朝一夕の力ならんや、今日やまバ、明日やまむ、今年止ば、明年やはず、然して後その志をのべ、人一生の力をその道ぶる用ふる人、尚その奥儀ぶいたるそやもそうぶ、況我一月半月、乃至一年半年のほどめを以て、他人一生の功ぶ比んとハ、思ハざるの甚をなり、むかし李白書を匡山よりむ、漸傍く他行きし時、道ぶて老人の石ぶあてて斧をするぶあふ、是をとゝバ針となをべきとそもそもと云ぶるぶ感じく、

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

勤めて書をよく、終よその名をあらわし、小野道風ハ本朝名譽の能書なりとて手をまふべども、進ざるこそいとひ、後園に躊躇なる、墓の泉水のほとりの枝垂る柳よとひあげんとにれどもとどかざりしが、次第〳〵に高く飛ぶ、後よハ終よ柳の枝よりも、道風是より藝のつとむるにある事を、學ぶやまを、其名今よ高くなりぬ、知るとハ易く行とハ難しとふ説

知る事ハやすくおこなふがたく、然ともて行よべきなり、時をたがへを蒔、草ありぬ、糞うへばよくみのる、誰もしれど、唯その事をとりてきぞ

れど益なし、又そのときも、時を考へ、培のかひやく、鋤鍬のはたらき、夫〳〵に有く、その子細ある事、法をあされバ知ざる、善をきれバよく、惡をきらバ、そこなふ、よきをも子細ある事なり、つとめてまなバざれハ其理ろちがふ、今ときとなりぬるものハ、多くあるべざるなり、西施の美きこと、ハ知ざるものなし、然ともて西施のために心を傷むる者ハあり、東隣の娘そのかほよきこと西施よ及バざれども、心その為ようぞく、甘露ハ天下の至て甘きものなり、ふる人ども飲ことを思ふ、慾なし、抹頭の醴ハ時ありて好むことあり、是もまた

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用

厚薄のちがひあるべなり、圍碁は小藝なり、然してその勝
べき理をさぐぬるにあり、先をもとばうつと云
こと、ありやもせき事なり、さりとて先はたゝくものなり、
善事のよきをありやもさくしく善事をもるはかりこと事
なり、

よとかむるもかなしと毀ることも必察すべしとの説

毀譽は人の大節なり、然といへども世擧て譽るもかなら
ず察をべし、人こぞりて毀るも必さうにあらず、況一人は
そしるをやたとへば訟事あらん時、兩方理ありと思へばこそ、互
によいひはりてやまざるものなり、是を奉行のことばゝんこ、兎角

ひとりはうち一人はまくべしからる人は奉行をほめ、負る
人はそしることなり、又あき人もうるともそれともなき人は是
をよしと思へばこそ交るなれ我よしと思ふをばほめ我あ
と思ふをばそしる習ひなれば、その毀譽よりてその人の善
悪も分ちがたく、おゝむね一盃の酒なども上戸は醉ひて
おもしろきものなりといひ、下戸はひて苦しきのなりと
ふやうに人傳などよろこんことをば覺束なきこともあり、昔人
ありて、其子をひる寺へおきしに、暫ありてあげう
て、住持のことを誹りなるは我よ月代それといひなをば
例の如く剃るを、そりやものをそあをとさんぐに

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』　請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

ろうと、ある日我厠へゆきたるを見て、何とて厠へ行ー
不届なり、向後厠へゆくべからずと、其後朝飯ごとに
味噌をもりたるに、さても味噌をもるがきこえぬとて、
理不盡の次第殆困窮に及ぶとて、かくなりたるを、親
きゝて、さりとては出家ども似合ざる事なりとていそ
ぎ山へ登り右の事ども語りければ、住持もていやく
さやのことてもなく、常々髪よくそる故、そのおろ
そかなるをいましめ眠りをさまし、こゝろを見るべきものぞと切
こゝ俠とて是をきゝ、そのうへ厠も常の厠へはゆかで、
奥なる隱所へ行をとがめ、味噌も常のごとをさゝぬ、

客へ遣すべきを法の是等の指南をそうべきもの
ぞと申ければ、親もおそれ伏しける、信濃の國その原
とかや所の木あり、遠くより見るにそ帚のごとくの如しよろく
是を帚木とかやいへれど近づきてこれぞ帚と似る所もなく
打繁きりとうや、誠に遠より見聞くに、親しくきゝては多
く此帚木の類なるべし、凡人の物を批判をも、吾こゝのむ
所をそしるものなき、俠士の歌よむ人の許判させ、
日蓮宗に真宗の許判させんよいでう公論あるべき、同じ
道を二人して行むに、一人は健ろうまして此道ちがひ、
一人をはなして遠しとやせん、是こそ違ひあるまじ、心こゝろ

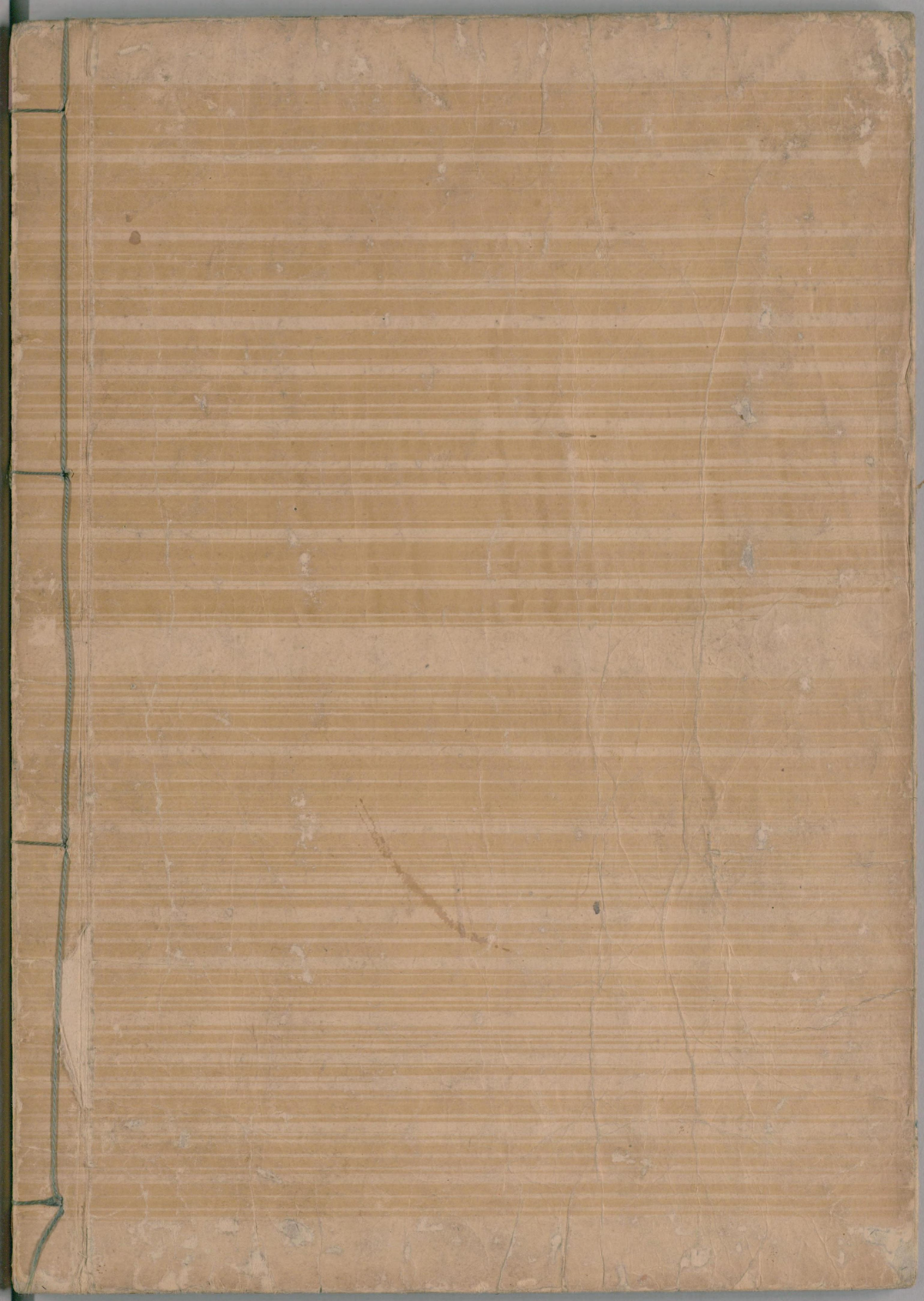
うひろれバなり、たとへバ義経のことを論じ、義経をよしと思ふ人のいろんこゝハ、此人誠ニ幼より常人ニてハおハしまさゞりし、共ニ天を戴うざる讎を報ぜんと、夜夜院を出く劔をうち、遥ニ秀衡が人となりをうかゝひ、是より飛鳥ニ落るだりの勢の平家を二三年のうちにほろぼし、亡父の恥辱をそゝぎ、法皇の宸襟をやすめ奉り、再びなそらる源氏をおこし、兄頼朝を天下の武将と仰せめらりと云、丈義経ニ不満人ハなるほど此人戦争一通りハ自由を得る人なゞら、平氏を亡し忠盛の女をいを、梶原景時と詮なき口論、大将らん人のもちゞニ似ぞ、腰越より追ひ、さまよひもいろをふろまあり、然るを都ニ逃のがり、頼朝追討の院宣を申うけ、芳野山まてハひとりの静よろれる、兒女子の涙をもほろ〳〵なゞ、一人の義経よと思ふ人の論と、あゝと知る人の論ハまちれ雪と墨なるべし、其あしき所をとりて、よき所をとらふ、是人を用ゆるの道なり、その悪きをバあゝうよ、よきをバよろこぶる、是公の論なり、其分分の相應ニ活いく云をあり、鼠を甚大なりとも、牛の小きニハ及バず、蚯蚓を甚短しとも、蚯蚓ハ長うるべし、今日人をよといひて譽るも、悪しと云く毀るも、その場〳〵を考ふべし、

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2
ガラス使用

梅園叢書卷之上

国立国会図書館　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『梅園叢書』 請求記号 121.89-M562b2

ガラス使用